



時間と空間を超えてきた資料が
北の文化を話しはじめる

北方民族博物館はユーラシア、北アメリカ、
グリーンランドの先史時代から現代まで、
北方文化を対象とする博物館です。

第6回 北方民族文化シンポジウム

今年度の北方民族文化シンポジウム（主催：北方文化振興協会、オホーツク国際流氷ロード網走市実行委員会）は、11月3日と6、7日の3日間にわたり開催されました。

3日は『北方民族の狩猟生活と北方動物』をテーマに、作家・戸川幸夫氏の講演がありました。日ソ合作映画「オーロラの下で」を制作した際の話を変えながら、シベリアに住むツングースの生活が紹介されました。6、7日のシンポジウムは『定住と移動』をテーマに、北方諸地域における移動と定住の在り方、またそれが歴史のなかでどのような意味をもつのかについて熱心な発表、議論がなされました。岡田宏明（北海道大学）、荻原眞子（湘南国際女子短期大学）、黒田信一郎（北海道大学）の各氏には座長を、また、西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）、大林太良（北海道立北方民族博物館）にはコメンテーターをお願いし、活発な議論を盛り上げていただきました。以下に各発表の要旨と議論の概略を紹介します（発表順）。

西田 正規氏（筑波大学）

「定住の人類史的意味」

人類史のなかでも最も古くから定住生活をはじめた



文化のひとつである縄文文化について、遊動生活から定住生活への移行の要因と、それを人類史の中でどう考えるべきなのか、といった大きなスケールのなかで定住化をとりあげる。このような定住化は、大きな気候変動のなかで、今まで利用しづかったデンプン質の食物に依存することによって広く中緯度森林地帯にみられた定住化のプロセスの一つである。高緯度地帯ではまた別の考え方の枠組みがあるのではないかと。

ウーラ・ヨハンセン氏

（ドイツ ケルン大学）

「スイベル（転環）=極北圏の動物飼育に特有な技術」



極北地域の動物飼育文化にみられるスイベルは、その機能や分布から、最初は犬を繋ぎとめるために極北圏の犬飼育民によって開発され、それらはすぐに極北地域に拡散し、新大陸にも渡った。やがて南のサモエドグループに採用されたこの機能はトナカイに^{いぬぞり}応用されて拡散した。繋ぎとめる機能ばかりか犬籠のハーネスにも利用されたスイベルの存在から、極北圏の人びとは軸つきの車輪を南部の人と同様発見したといえる。

葛野 浩昭氏（聖心女子大学）

「トナカイ・サミ人と河川サミ人の社会関係」

フィンランド・ウツヨキ



地方のトナカイ放牧を生業とする山岳ラップと鮭^{マス}漁撈を中心とする河川ラップの間には、生業上のスミワケと社会関係が存在する。各グループは互いに無関係ではなく、生業によって獲得したものの交換や労働力の融通がみられ、今日でもこれらの交換や使用人、養子関係といった緊密な社会関係、相互依存関係がある。トナカイ放牧者も河川



戸川 幸夫氏



講演会会場

定住民も互いの存在を前提としたスミワケをすることによって、極北の自然環境に適応してきた。

イーゴリー・クルーブニック氏
(ソ連科学アカデミー/所属は開催当時のもの)
「シベリア諸民族の移動生活の類型—伝統的な様式と近代の変容」

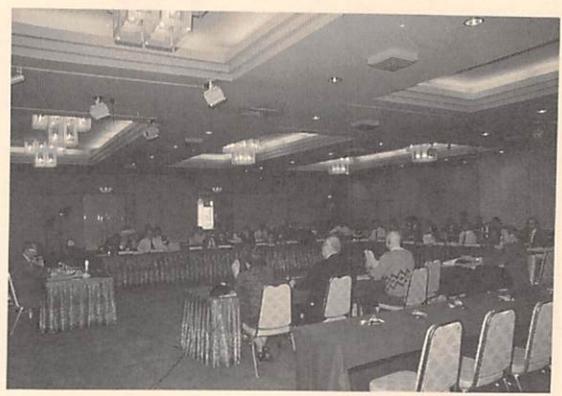


シベリア先住民の伝統的な、あるいはロシア人の進出にともなう文化接触後に成立した文化には、定住性と移動性の間の多様な生業様式が見られる。これらを復元、分類し、ロシア帝国、旧ソビエト、さらにごく最近にみられる変化にともなう影響と、シベリア諸民族の将来の可能性についても指摘する。

渡部 裕
(北海道立北方民族博物館)
「アイヌの海獣狩猟と定住性—斜里、網走アイヌを中心に」



斜里、網走地域のアイヌは海獣狩猟や海漁を含む海洋資源に依存した生業により定住的な集落を



シンポジウム会場

形成してきたが、和人による場所請負制のもとで、伝統的な集落形態や生業形態は大きく影響を受けた。

岡田 淳子氏
(北海道東海大学)
「季節移動と住み替え—西南アラスカの事例」



ベーリング海沿岸のエスキモーは、夏海岸部に集中し、冬分散して生活する季節移動の型をもっていたが、それは近代における現象である。ネルソン島における集落の在り方と生業との関係、近年における要因等から、500年前から200年前までは大きく移動するものではなく、根拠地は一つであった。1900年代以降、交易のための毛皮猟のために、冬の村は分かれるが、その後再び根拠地が一つになった要因は、学校や滑走路の存在とともに、スノーモービルや動力付きの舟の導入による移動のスピードアップが一ヶ所の根拠地に住むことを可能にした。



ウィリアム・ワークマン氏

(アメリカ合衆国 アラスカ大学)

「北アメリカ北方地域の先
史及び伝統文化における
移動と定住の関係」



北アメリカにおける定住と移動のありかたについて、先史から歴史期までを、言葉の定義を含めてまとめた。定住性と移動性のもつ利点と欠点を考慮し、生業の在り方、資源の獲得、住居のタイプ、社会的な要因など、定住と移動の間にみられるさまざまなタイプの事例と要因に触れ、北アメリカの典型的な住まい方は、冬季に貯蔵食物をともなう“半移動的な”生活であり、定住化への背景には人口増加があったのではないか。

スチュアート ヘンリ氏

(目白学園女子短期大学)

「定住と生業—ネツリック・
イヌイットの伝統的食生活
にみる継承と変化」



カナダ極北地域で伝統的に季節移動生活をしてきたネツリック・イヌイットの近年の定住化にともなう生業と食生活の変化について、ペリーベイとその周辺における調査からその社会と文化はこの数十年の間に大きく変化したが、このことはネツリック・イヌイット独自の生業伝統と食生活の崩壊、もしくは消滅を意味するのではなく、自律的に状況変化に対応したもので、現在も文化と社会の独自性は継承されている。



当館常設展示見学 (11月7日)

原 ひろ子氏

(お茶の水女子大学)

「カショーゴティネ(ヘアー・
インディアン)における定
住と移動」



1961年から1963年のフィールドワークによるカショーゴティネの社会においては、極小化された男女の分業が観察され、また社会生活の単位は個人であって、家族集団や地域集団ではない。このような社会は、伝染病による新たなサバイバルへの適応として、また狩猟環境の変化に対応して発達してきたものであろう。政府や商人、宗教、病気、近代工業製品などの影響によってその定住性と移動性は変化してきたが、将来の問題として、定住性と移動性は都市環境や地球レベルでの環境のなかでどう変化していくのかについても心理的あるいは経済的要因も含め考える必要がある。



レセプション (11月6日)

各セッションおよび総合討論では多くの問題が議論されましたが、「定住と移動」に関わる用語の定義とその違いの認識や移動性と定住性は互いに排他的なものではなく、その両極端の間のなかで各文化をどう位置づけるかが焦点になりました。また外見的に判断するばかりか心理的な意識の問題も考慮する必要があることや、人類社会全体のなかで、あるいは人類史のなかで定住と移動の意味を議論することも重要であることなどが指摘されました。

○平成3年度第3回講習会

アイヌの衣服と文様

講師/アイヌ服飾研究家 児玉 マリ氏

アイヌ民族博物館（白老）および市立函館博物館の特別研究員で、長年アイヌの服飾について研究を続けておられる、札幌在住の児玉マリ氏を迎えて、11月24日に講習会を開催しました。

当館の普及活動事業のなかで、アイヌをテーマとしておこなうのは今回が初めてであり、講堂は満員となりました。以下に要旨を紹介します。

動物衣と植物衣について

アイヌの衣服は、動物衣と植物衣、大陸や本州から入ってきた木綿や絹で作られた衣服などに大きく分けられる。

動物衣には、陸獣、海獣、魚、鳥が使われていた。いまからおよそ350年前に、蝦夷地を訪れたイエズス会・宣教師のアンジェリスやオランダの航海家フリースは、和人がアイヌと接触する以前の、アイヌの衣服に関する記録を残している。それには、アイヌが動物の毛皮を着ているという記載があり、またアツシと思われる衣服に「麻の粗衣」という表現が使われている。

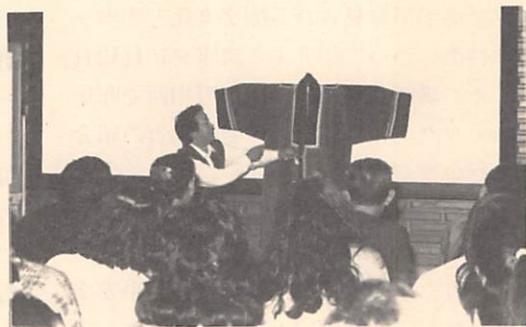
一方、植物衣としてはオヒョウなどの木の皮の繊維を糸にして、織機で布に織り、服にしたアツシ（樹皮衣）と、主としてサハリンで作られていた、イラクサの糸で織った草皮衣がある。草皮衣には、イラクサの糸だけで作ったレタルベとそれ以外の糸が入っているカーアハルシとがある。

木綿衣について

木綿衣のなかでもアイヌによって加工された服は、文様を施したルウンベ（色裂置文衣）、チカルカルベ（黒裂置文衣）、カバラミブ（白布切抜文衣）、チヂリ（刺繍衣）の四種類に分けられ、どれも本州から木綿が入るようになってから作られたものである。

ルウンベは、木綿衣のなかで最も手の込んだ衣服で、古裂で衣服を作り、その上にテーブ状の布を折りたたみながら止めて、文様を構成する。

チカルカルベは、木綿衣に黒または紺木綿の切伏をつけた衣服で、切伏文様はほとんど直線文様から構成されている。静内などの地域では、切伏



を木綿衣全体に置くが、日本海側では背と腰とに分けて置くなど、形には地域差があらわれている。

文様を切り抜いた大きな白生地を、木綿衣につけたのはカバラミブである。白生地は、服の前面と後面いっばいに使うのが特徴で、アイヌが簡単に生地を手に入れることができるようになった、大正時代に入ってから作られたものと思われる。

最後のチヂリは、切伏のついていない黒の木綿衣に、直接刺繍を施した衣服である。

また、木綿衣に見られる切伏は本州から伝わったものではなく、サハリンや大陸など北方の影響を受けていると考えられる。

講師が研究を始めた当時は、アイヌの衣服について、まだ十分にわかっていないことが多かったが、最近のソ連、中国東北部の先住民族との交流により、衣服の形や布の種類について比較検討できるようになり、今後ますます調査が進むことを希望すると述べられ、講習会を終了しました。

このあと会場から、チヂリの起源や衣服につけられた文様や刺繍の意味などに関する多くの質問が講師に寄せられ、アイヌの衣服に関する参加者の関心の強さ、興味の深さがうかがえました。

*アツシの説明の際に上映したフィルムは、以下の通りです。

「アイヌの装い—衣服と生活—」

監修:児玉作左衛門、児玉マリ、三上マリ子

企画:北海道教育委員会

制作:日経映画社（昭和43年）

○平成3年度第4回講座

オホーツク海沿岸の遺跡

—とくに擦文・オホーツク文化について—

講師/ 青柳 文吉 (当館主任学芸員)

オホーツク海沿岸に見られる^{みつみん}擦文文化とオホーツク文化の特徴について紹介する講座を10月13日開催しました。講師が網走管内湧別町川西で昨年行ったオホーツク文化の住居址の発掘調査の紹介もあわせて行いました。

まず、本州の弥生時代に当る時期は、北海道ではまだ稲は栽培されていなく、一般に縄文時代と呼ばれており、その時代の終りに奈良・平安文化の影響を受けた人々が本州から入ってきて、道央、道北、道東にかけて擦文文化が形成されたことを概説しました。この文化の特徴としては、住居が大河川の河口付近に多く分布していること、また住居は四角形をしており、床面には4か所の住穴があり、壁際にはかまど、床中央には炉が見られることを説明しました。生業としては、狩猟採集のみならず、床土から栽培植物のアワやキビなどの種子が発見されていることからわかるように、農耕もなされていたと述べました。

一方、擦文文化と同じ時期にサハリンやアムール川流域から南下してきた、北方的要素を多く含んだオホーツク文化について、北海道では日本海側の利尻や天塩からオホーツク海沿岸、知床半島、根室周辺まで分布していたこと。住居は主に砂丘や段丘に位置し、五または六角形をしており、内部中央には炉があり、これを囲むようにコの字形に粘土が貼られているのが特徴であること。さらにアザラシ・トドなどの海獣狩猟、クマ・シカなどの陸獣狩猟、漁撈が生業の中心であったことを説明しました。

最後に、オホーツク文化の起源や終りに関しての研究課題をまとめて講座を終了しました。

○ロビーコンサート '91

青少年のための 室内楽の夕べ

年内最後の行事として、12月27日午後6時より網走市の山田記念青少年育成財団との共催でロビーコンサートを開催しました。札幌交響楽団員である石原ゆかり、富樫耕、遠藤幸男、文屋治実の四氏による弦楽四重奏で、1週間前に定員の150名は申し込みで一杯になりました。

第一部は、ハイドンの弦楽四重奏曲「皇帝」で始まり、次に簡単な曲解説の後、シューベルトの「断章」が演奏されました。四つの弦楽器がおりなす幅と深みのある音色がロビー内に広がり、聴衆は静かに聞き入りました。



第二部に入ると、富樫氏から演奏者の紹介があり、「肩の力を抜いて聴いてください」の一言に、リラックスした空気が流れました。ドヴォルザーク作曲「ユーモレスク」の軽やかなメロディを楽しんだ後、青少年にも親しみやすいようにと各楽器の特徴や奏法などを解説していただき、ハイドンの「セレナーデ」、日本の歌から「雪」、「七つの子」が次々に披露されました。最後の曲クライスラーの「愛の喜び」が終わり、花束贈呈の後も拍手なり止まず、アンコールではバッハの「G線上のアリア」を演奏いただき、1時間半のコンサートが終わりました。馴染みのある小品ばかりで、楽しくお聴きいただけたと思います。

室内楽ならではのアットホームな雰囲気のおしゃべりと、年の暮れにふさわしい選曲で、ご満足いただけたのではないかと感じております。また、照明をこらしたロビーは、コンサートを盛り上げ、特別展示以外の活用としても、今後このような企画を考えていきたいと思っております。



10月3日、4日の両日にわたり文化・社会教育施設、各種学校及び著作物利用団体などの関係者を対象に、北海道東北地区著作権講習会が福島市で開催されました。

1日目は、文化庁の講師から著作権の概要説明を受けたあと、日本民間放送連盟、日本音楽著作権協会、日本芸能実演家団体、日本書籍出版協会、日本ビデオ協会の協賛団体より、各方面における著作権の現状や問題点などの実例をとりあげながら、わかりやすい説明がありました。

「著作権制度とは、著作権者等の権利の保護を図り、もって文化の発展に寄与することを目的とする制度である」という著作権法の条文の説明から始まりました。これには、著作者等の権利や利害を侵害することなく、これをどう文化の発展に運用していくかという多少矛盾する意味が含まれています。例えば、今話題になっているレンタル

北海道東北地区著作権講習会

10.3, 4 於：福島

ビデオは、著作者からすればビデオの売り上げに影響するわけですから権利や利害の侵害ともいえますが、文化の発展ということからすれば一つの方法といえます。この場合、業者は著作権者等に一定の対価を支払うことで、レンタルすることを認められている特例です。一方、博物館を含めた施設等における、展示物などを説明するためのTV等からの録画物、録音物については、公的な記録保存所において保存する場合を除き、保存期限が定められており、長期保存は認められていません。しかし、これらの施設において、映像等のライブラリー化を充実させることに力を入れている現状において、この問題と著作権制度との接点をどう見い出していくかが今後の課題といえるでしょう。

また、2日目の自由討議では協賛団体を含め、各職場がかかえている問題点を中心に意見交換がなされ、大変有意義な講習会でありました。

(管理課 山上 和弘)

平成3年は、アイヌ語研究に功績を残された知里真志保氏の没後30年目にあたります。知里氏をしのびつつ、アイヌ語に関わる諸問題を、さまざまな立場から考えていくことを目的に、11月29日、30日、北海道大学学术交流会館において第3回北方言語研究者協議会『アイヌ語の集い』（主催：北方言語研究者協議会）がひらかれ、アイヌ語の特徴、アイヌ語の研究史、アイヌ語教育、また知里氏の思い出についてなどの発表がありました。

また『今後にむけて』の討議は、「アイヌ語の研究課題」と「アイヌ語の研究とアイヌ文化の継承、アイヌ語の教育について」の二つを主な柱にすすめられました。

発表題目は以下のとおりです。(発表順、敬称略)

- 奥田純己(札幌学院大学)『アイヌ口承文芸の語り方解明のために』
- 大島稔(小樽商科大学)『アイヌ語の「語」の特徴』
- 片山龍峯(リラ工房)『アイヌ語と日本語の同系

第3回北方言語研究者協議会

11.29, 30 於：札幌

- 証明…語構成分析と音韻対応による』
- 野本正博(アイヌ民族博物館)『白老のチセについて』
 - 村木美幸(アイヌ民族博物館)『ウボボ“アヨロコタン”を追う』
 - 萩中美枝(日本口承文芸学会理事)『知里真志保のアイヌ語への思い』
 - 佐藤知己(北海道教育大学)『アイヌ語の動詞の「複数形」について』
 - 柳下み咲(国立国会図書館)『19世紀後半の欧文文献にあらわれるアイヌについて』
 - 村崎恭子(北海道大学)『樺太アイヌの昔話 TUYTAN』
 - 伊藤せいち(オホーツク文化資料館)『アイヌ語地名索引のための表記法』
 - 荻原真子(湘南国際女子短期大学)『「巫者」をめぐる - アイヌ文学の起源をシャマニズムの問題によせて』
 - 池上二良(北海道大学名誉教授)『アイヌ語の大陸語的要素』
 - 切替英雄(鳥取大学)『アイヌ語研究の流れ』
 - 谷本一之(北海道教育大学)『江戸・幕末史料にみるアイヌの芸能』
 - 竹端瞭一(川村学園女子大学)『学校た アイヌいたッ あえいわんける』
 - 福岡イト子(日本私学教育研究所)『アイヌ語を通して生徒たちはどう自己変革したか』
 - 熊本孝(北海道大学)『アイヌ語教室とアイヌ文化』
 - 秋辺得平(北海道ウタリ協会)『アイヌ語教室の実践』
 - 大林太良(北海道立北方民族博物館)『知里先生の思い出』
 - 司会:中川裕(千葉大学)、宮岡伯人(北海道大学)『今後に向けて…討議と総括』
- (学芸課 笹倉いる美)

北海道民族学会は、今年10年目を迎えたということで、大変充実した活動を行ってきています。前回までも興味ある内容でしたが、今回は特に北方地域のフィールドからの発表でしたので、報告者が代表して参加しました。

小樽商科大学言語センターの大島稔助教授の発表は、1991年2～3月にかけて行った旧ソ連マガダン州の東シベリア海に面するペベック市でのトナカイ・チュクチの調査からでした。大島氏は言語学をご専門とし、調査の目的は歌など民俗芸能の録音・録画だということでしたが、彼等と一緒に過ごされた貴重な経験をもとに、生活の様子をお話いただきました。なかでも、「飼われるトナカイにとっても人間のそばで生活することに利点があるのではないか」「トナカイ飼養や牽引獣に用いないのに、犬を飼っているのはなぜか」「家庭シャーマンと専門シャーマンの呼称の別」「親族形態はどうなっているのか」などの点に質問や

北海道民族学会1991年第3回研究大会 12.7 於：小樽

意見が集中しました。

2番目に発表をなさったのは同じく小樽商科大学商学部の津曲敏郎助教授で、1989～90年に行ったアムール川流域のツングース調査についてでした。10に分けられるツングース諸語を話す民族のなかでも、ナーナイの村でのフィールドワークを主に話されました。スライドで各調査地のトピックを追いながら、ハバロフスクではナーナイの老爺からの聞き取りの様子、シカチ・アリャンでは、放置されたままの岩絵など、ナーナイの中心地であるナイヒンでは、ロシア語とナーナイ語が併記された看板が印象的でした。それに関連してラジオ・テレビの放送や学校でのナーナイ語教育の現実などに触れられました。また、シャーマンの治療の様子など貴重な写真・録音も披露されました。

旧ソ連での現地調査は報告が少ないだけに、お二人の発表から確認できたことも多く、また、新たな関心を引き起こす興味深いものでした。

(学芸課 齋藤 玲子)

「新しい世紀をめざす博物館」を大会テーマに、第39回全国博物館大会は、東京都・国立教育会館と東京国立博物館を会場に、12月9、10日の日程で行われました。大会に先だって、博物館法制定40周年を記念して博物館施設に貢献のあった人々への文部大臣表彰が行われ、114名がこの栄に浴されました。

大会第1日目は全体会議で幕が開き、行政報告のあと、大会テーマを標題にシンポジウムが行われました。大阪文化財センター理事長（元奈良国立文化財研究所長）坪井清足氏を座長として、5人のパネラーによって21世紀をめざす博物館の在り方について討議がなされました。「博物館には、サービス事業という発想が足りないために、来館者のレベルアップが置き去りにされてきた」という反省。将来の博物館の在り方については、「生涯学習時代、高齢化社会にあつて、能力があり専門技術をもつ人々が博物館に参加できる形をつく

第39回全国博物館大会 12.9,10 於：東京

る必要があり、また楽しくあそびながら学ぶことのできる施設を追求することも大切」。専門職の学芸員については「人事交流によって、移動型の学芸員の存在も必要ではないか」、といった意見が出されました。

大会2日目のフォーラムも、大会テーマ、新しい世紀をめざす博物館を標題に、東京国際大学教授（元東京国立科学博物館学芸部長）青木国夫氏と、坪井氏の進行で行われました。参加者からは博物館職員の職場環境や処遇の問題、パソコンをはじめとするオフィス機器の利用の在り方、国際化社会、高齢化社会にあつての博物館の社会的な責任をどう考えるかなど、現状から将来を見据えた意見や問題提起がなされました。

21世紀に向けての生涯学習時代に即応する博物館の振興に関して、いくつかの項目について大会決議をおこない、2日間の日程を終えました。

(学芸課 青柳 文吉)

Q

カヤックという動物の皮を張った舟がありますが、どんな民族が使っていたのでしょうか。また皮の種類や舟の用途も教えてください。

A カヤックはおもに極北や亜極北地域のイヌイトやアリュート、チュクチ、コリヤークの人たちが使ってきました。カヤックの特徴は、人が乗る部分を除いて甲板部分も皮で覆うことによって、少々荒れた海でも水の侵入を防ぎ、小さな舟でも海獣狩猟や漁をすることができるとのことです。流木を巧みに組み合わせた複雑な木枠に毛を除いたアザラシなどの皮を張ったじょうぶで軽いカヤックは、両足を伸ばした状態で座って漕ぎます。多くは1人乗りですが、アリューシャン列島やアラスカ南部では2、3人乗りも使われていました。木材が十分に手に入らない地域で考案されたすぐれた道具の一つといえます。現在、スポーツボートとして人気のあるカヤックは、このイヌイトやアリュートの人たちの皮舟をモデルに作られています。

また、地域によって8~10人も乗ることができるウミアックと呼ばれる大型の皮舟が、セイウチや鯨などの猟やキャンプの移動に利用されていました。

(学芸課 渡部 裕)

'92.2~3の行事

- ・2/8~3/15 第3回特別展
「アイヌ文化にみる猟と漁」
 - ・2/23 第5回講習会
「イヌイトの雪の家(イグルー)」
講師 佐々木亨(当館学芸員)
 - ・3/8 第2回講演会
「アイヌ民族と北方諸民族の文化交流」
講師 菊池俊彦氏(北海道大学教授)
 - ・3/15 第5回講座
「アイヌ語史試論一方言から歴史へと」
講師 中川裕氏(千葉大学助教授)
- 特別展は別途観覧料を申し受けます。
- 3/8,3/15の講演会、講座は午後2時より当館講堂にて開催します。2/23の講習会は午後1時より講堂で説明後、野外でイグルーを作ります。参加はすべて無料です。



ディスプレイデザイン 2賞を受賞

当館の常設展示は、1991年度ディスプレイデザイン年賞・優秀賞、およびディスプレイ産業大賞優秀賞に選ばれ、12月4日東京で受賞式が行われました。

年賞(日本ディスプレイデザイン協会)は、博物館などの文化施設、デパート、展示会などのデザインのうち、優秀なものに対して贈られます。博物館施設が受賞するのは、道内では'85年度の釧路市立博物館に次いで2番目、全国でも7施設目です。また、産業大賞(通産大臣官房商務流通審議官賞)は、年賞受賞施設の中から社会的貢献度などを勘案し、優れたものに授与されます。

「友の会」入会のご案内

季刊誌や友の会だよりをとおして、北方地域の諸民族の文化を知っていただくための、「北を愛する」仲間の集まりです。

会員の特典、会費、入会手続きなど詳しいことにつきましては、(財)北方文化振興協会内

「友の会」事務所まで
〒093 北海道網走市宇潮見313-1
TEL 0152-45-3888

第3回特別展

アイヌ文化にみる**猟と漁**

平成4年2月8日(土)~3月15日(日)/休館日 月曜日、2月12日(水)
9時30分~16時30分

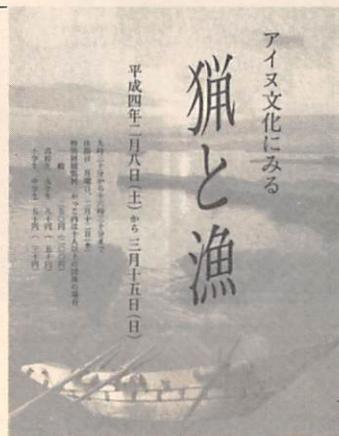
観覧料

一般	高校生・大学生	小学生・中学生
250(200)円	80(50)円	50(30)円

かつこ内は10人以上の団体の場合

アイヌ民族は北海道をはじめ千島・サハリンに暮らし、漁猟や採集によって生活していました。

今回の特別展では、とくに北海道アイヌの生業活動のなかの狩猟と漁撈ぎよろうについて、さまざまな民族資料や考古資料、アイヌ風俗絵などをおして紹介します。



寄贈資料紹介

○石鍾ほか1点

網走市の水谷昭参氏より、海底よりひき上げられた石鍾ほか1点が寄贈されました。

執筆者ならびに出版社より

贈呈をうけた書籍 (10月～12月)

河野廣『解説付き写真集 幻の馴鹿部隊』1991

黒田信一郎他編『ツングース言語文化論集1』北海道大学文学部 1991

森浩一責任編集『伊勢と熊野の海／海と列島文化8』小学館 1991

Hara, Hiroko Sue. *The Hare Indians and Their World*. National Museum of Canada. 1980.

主な来館者

10/5 中国黒竜江省文物管理委員会代表団一行5名

10/8 四ッ柳高茂氏ら(財)北海道地域総合振興機構一行6名

11/3 画家安野光雅氏ら週刊朝日一行2名

11/7 第6回北方民族文化シンポジウムのパネラー、参加者40名

11/12 藤田良一氏(財団法人千里文化財団出版部長)

12/14 評論家草柳大蔵氏ら

12/19 堤功一氏(外務省駐道大使)



中国黒竜江省文物管理委員会代表団一行

北方民族博物館だより
— 第 3 号 —
1992年1月25日発行



画家 安野光雅氏

観覧者動向 10月～12月

10月 3,527名

11月 1,471名

12月 609名

観光シーズンの終了とともに入館者数が減少したこの3ヶ月間でした。

はじめて経験したシーズンですが、来年にむけての懸案事項としていきたいと考えています。

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (10月～12月)

10/14 アイヌの「自然生活の知恵を学ぶ集い」(ヤイユカラ・アイヌ民族学会主催)静内町で開催/D

10/15 国際シンポジウム「北方ユーラシアと北アメリカの宗教と生態」(北方学会主催)北大で開催/D

10/23 興部町の中学生が中心となった「コロポックルの会」、同町遺跡調査の成果を展示/D

10/26 学芸職員研修会(道博物館協会主催)美幌町で開催/D

10/27 ピウスツキ生誕 125年を記念した国際シンポジウム、サハリン・ユジノサハリンスクで31日より開催/Y

11/8 第6回北方民族文化シンポジウムで、当館学芸職員初発表/AB

11/12 擦文時代の小樽市・蘭島遺跡から、アムール州トロイツコエ遺跡出土品と類似の、玉髓製耳飾り発見/D

11/14 ウタリ総合センター、札幌市

「かでの2・7」にオープン。15日には「アイヌ文化の集い」開催/D

11/30 「北のシルクロード 山丹交易と蝦夷錦展」、北見市・北方歴史美術館で開催。4月末まで/D

12/2 小学生を対象にした「オホーツク流氷科学クラブ」、道立流氷科学センターに誕生/D

12/15 阿寒アイヌ民族文化保存会、ユーカーラ劇「アイヌラックル伝」を同町公民館で公演/D

12/18 カナダ・ノースウェストテリトリー準州の東半分に、アイヌトの準州「ヌナブート」誕生/AS

12/31 函館市の清水信勝氏、アイヌの「コサ笛」復元/D

* AS朝日新聞(道東北網版)、AB網走新聞、D北海道新聞(オホーツク版)、Y読売新聞(北網版)

* 複数紙に掲載されている場合は、扱いの大きい方による。

編集後記

ようやく自分の目指していた道に進めそうだ。子供ができた。家を建てた。旧年の出来事や新年の意気込みが伝わってくる年賀状に書かれたさまざまなメッセージ。いつものように驚いたり、感心したりの正月三箇日であった。その1月ももう終わろうとしている。

3か月ごとの博物館の動きや予定を伝えるこの「だより」は、これが今年第1号である。活動の軌跡や今後の歩む方向をお伝えできるメディアになるようにと、気持ちを新たにしたい正月であった。

本年もみなさまのご支援ご協力のほど、よろしく願いたします。

(佐々木)

北海道立北方民族博物館
〒093 北海道網走市字潮見313-1
TEL 0152-45-3888